

広島大学学術情報リポジトリ

Hiroshima University Institutional Repository

Title	近世東アジアの〈教諭〉思想と日本社会：『小学』本と『六諭衍義』の流通
Author(s)	中村, 春作
Citation	中國中世文學研究, 63-64 : 382 - 395
Issue Date	2014-09-29
DOI	
Self DOI	
URL	https://ir.lib.hiroshima-u.ac.jp/00051470
Right	
Relation	



近世東アジアの〈教諭〉思想と日本社会

—『小学』本と『六論衍義』の流通—

中村春作

一 沖繩八重山地方に残る『小学』本

沖繩(琉球)に今日残されている近世期の文献の中に、朱熹(一一三〇—一二〇〇)が編したとされる〈教諭〉本、『小学』に関わるものがいくつもある。その内の一つ、現在、石垣市立八重山図書館に所蔵される筆写本(新本家文書『小学一之巻』)には、この書物の由来を「タウ此書物ヲ、小学ンデ、イチヤル本ノヨハリハ、昔夏殷周三代ノ、盛ニ道行ワレル御時分ナカイ、小学校、大学校ンデイチ、……」といったぐあいに、琉球ことばを交えた解説が施されている。¹⁾

朱熹編『小学』とは、実際には、朱熹の委嘱で劉子澄が編集し、宋代に成った教育書である(一一八七、成立)。内編(立教、明倫、敬身、稽古、を説く)と外編(『書経』『儀礼』『孝経』『論語』等々の經典からの抜粋集)から成り、清掃応対から自己修養、為政者としての心得まで、わかりやすく例示を以て教え諭す内容のもので、

元々明時代、初学者向け教科書として広く普及したものである。この『小学』が、琉球方言によるカタカナ表記で解説されて、沖繩本島からも遠く離れた、最南端の地、八重山地方(先島諸島)に今も残されているのである。

他にも、『二十四孝』『三字経俗解』等の、同類の書籍、古文書が石垣島には残されており、それらからは多くのことが明らかになる。近世後期、八重山地方において、和文訓読体を基に、琉球語(八重山方言)による解説を付して、儒学の基礎教養が一般に教えられていたこともその一つである。そしてまた、那覇から隔年で派遣された進貢使の歴史や、久米村に集住し、代々対中国外交に携わった閩人三十六姓の存在から想定されるような、明・清との地理的・文化的近さにもかかわらず、さいはての島にも江戸の和刻本が流通し、訓読が漢文の読み方として一般に行われていたことが明らかになるのである。

この古文書を翻刻、紹介した高橋俊三は、

(1) 教育史上では、八重山でも初等教育のテキストで『二十四孝』を取り扱ったこと、漢文を訓読して、意味も同時に習ったらしい。講義の内容を書く試験があった。

(2) 八重山の学校においても、訓読語の影響を受けた沖縄方言で講釈がされた。

(3) 八重山においても、中国・台湾・韓国・本土などと同様に孝道が尊重された。

等、と結論している。ちなみに最初に紹介した『小学』テキストは、日本本土でも広く活用された明代、陳選『小学句読』を底本としたものであり、解釈の身から、江戸期の儒者、宇都宮遯菴の『小学句読口義詳解』(一六八〇)に基づくものと想定される。³⁾

これはほんの一つの例に過ぎないが、こうした、近世琉球における朱子学(教諭)本の流通過程、普及のあり方を切り口として考えるとき、(鎖国)、あるいは(海禁)政策といった、通り一遍の教科書の歴史理解とはまた別の、東アジア全域における多様な書籍(「読み方」も含めた)の、(二方向的ではない)流通や、思想の土着化の様相がそこから見通されてくるのである。そしてそれはまた、東アジアの近世く近代において、朱子学が当該社会内にかなる意味を有したかについての、新たな考察へと私たちを導くものでもある。

二 琉球儒学を起点として、東アジアの朱子学を

とらえ直す

一般に、薩摩藩島津氏による琉球への侵攻(「薩摩入り」、一六〇九)以前の琉球を古琉球、それ以後、明治期の日本国への編入(一八七二―七九)までの時期を、近世琉球と呼びならわす。古琉球時代、三山時代から尚氏から統一王朝にいたる過程で、すでに中国明朝との進貢・冊封関係が発生し、中国往來の貢典を掌らしめたとされる閩人三十六姓の来琉、久米村への集住があり、また室町幕府、後には薩摩島津氏との交流も活発に行われていたが、儒学が本格的に受容されたのは近世以降のことである。

古琉球時代の思想を特徴づけるのは、独自の創世神話と神女組織に基づく固有宗教の世界であり、また、王家の帰依を得て隆盛を迎えた、京都五山から渡来した禅仏教であった。当時知識層において書記言語として流通していたのは、禅僧が伝えたヤマト(琉球から「日本内地」を指す呼び名)由来の和文であり、琉球最初の辞典『混効験集』(一七一)も、和語で古くからの琉球語を説明するものだった。古琉球時代から琉球とヤマトとの間を五山禅僧が多く往来し、琉球王府を中心に仏教を広めると共に、平安朝文学も含む和文文化を伝えてきたのである。

こうして、琉球に古くから和文文化が根付く一方、久米村に集住した中国南方からの帰化人集団、閩人三十六姓が対中国外交の専門家として活躍し、儒教文化を保存

し、中国（国士監）に派遣される留学生、官生の母体となってきた。琉球を代表する儒者、程順則、蔡温も、人三十六姓の末裔である。儒学は、こうした琉球王国を取り巻くこの二つの流れに沿って広まっていったのである。「近世沖繩の学問の主流は、当時の日本・中国と同様に、儒学であり、朱子学であつて、経書（四書五経）の講釈を中心としていた。ただ、沖繩の儒学の系統には、古琉球以来二つの流れがあつて、一つは禅僧等によつてヤマトから首里へ、他の一つは官生等によつて中国から久米村に導入された」（田名真之⁴）のである。琉球に儒学の学校、明倫堂が創立されたのは一七一八年であり、日本における藩校設立に先んじるものであつた。そこでの教育は主として久米村住の中国帰化人が担当していたのが、薩摩侵攻後、薩摩の禅儒、桂庵玄樹（一四二七一—一五〇八）の孫弟子、泊如竹（一五七〇—一六五五）の渡琉（一六三二）をきっかけとして、薩摩由来の朱子学が琉球に伝播し、和刻本による儒学の学習、それも和訓に依拠した学習へと変化していったのである。⁵

琉球儒学史を語る程順則『廟学紀略』（一七〇六）は、琉球儒学の起源を語つた上で、久米村において「文理精通なる者一人を択びて講解師」となし「句読鮮明なる者一人を択びて訓詁師」となして、そこから琉球における教育が始まつたことを述べている。この「講解師」と「訓詁師」による教授方法は、科挙（科試）を採用した琉球における伝統的教育組織として継続され続けたものであ

つた。一七二六年、琉球から薩摩に向かう途中、遭難して高知宿毛大島に回航され楳船の乗組員（琉球役人）から、土佐の儒者、戸部良熙が聞き取りした文書が残されている（『大島筆記』）。そこには、久米村の教師（「講解師」「訓詁師」）が、当初は中国音直読で教えていたのが、薩摩侵入後、薩摩由来の「文之点」に拠る「国読」（訓読）による教授に転換したことが記されている。ちなみに「文之点」とは、桂庵玄樹に起源する近世日本の訓読法の一つの定型となつたものであり、江戸期の多彩な訓読法は、この「文之点」から出発したものであつた。この薩摩由来の訓読法が琉球にも広く行き渡つていたのである。そしてこの「聞き書き」中、より重要なのは、「琉球朱子学ナリヤ」という土佐の儒者の質問に対し、「甚怪ナル様子」で「琉球学業トイへハ小学四書集註章句五経集伝ヨリ外ハナク何字ト云ヤウナル名目ハナキ」と答えたことである。⁶すなわち、近世期琉球人にとつて、学問、儒学といえ、およそ朱子学以外には想定し得ないことがここに記されているのである。またその学業内容が「小学四書集註章句五経集伝」という順序で記されていることにも注目しておきたい。

清の冊封副使、徐葆光の記録『中山伝信録』（一七二一）もまた「講解師」と「訓詁師」の存在に言及し、久米村聖堂の様子を記録しているが、その中に、次のような記述がある。

聖廟在久米村泉崎橋北門、南向。進大門、庭方広十
余畝、上設拜台。正堂三間、夫子像前又設木主。四
配各手一經。正中梁上、亦御書万世師表四大字榜
書。……、明倫堂左右兩廡、蓄經書籍文略備。国王
又命紫金大夫程順則刊刻聖諭十六條演義教節、月吉
講之。旧例、以紫金大夫一員司教、每旬三六九日詣
講堂、稽察諸生勤惰、兼理中国往來貢典、並參贊大
礼。

ここで注目すべき箇所は、「国王は、また紫金大夫程
順則に命じて、「聖諭十六條」教節を刊刻し、毎月の朔
日にこれを講じさせる。旧例では、紫金大夫一員に教授
を司らしめ、毎旬三六九の日に、講堂に詣つて諸生の勤
惰を稽察させ」と述べられている箇所である。「聖諭十
六條、演義（衍義）」が、明倫堂で定例に講じられてい
たという事実である。これは、琉球における（教諭）に
よる統治そのものの姿を伝えるものである。前に琉球儒
学は朱子学のみということを記したが、実は、朱子学經
典の詳細な議論が琉球でなされた形跡はきわめて乏し
い。それは江戸期儒学とも朝鮮朱子学とも大いに異なる
点である。近世琉球で求められたのは、きわめて現實的
な朱子学的社会の実現であつたからである。琉球のこう
した姿はむしろ、古制に則つて毎月朔日十五の二日に「聖
諭十六條」の講読会が開かれた、清末期中国の地方の姿
に相似するものである。

明治に入つて、第四代県令を勤めた西村捨蔵（一八四
三—一九〇八、彦根藩の出身、藩校弘道館で学び、江戸
に出て塩谷宕陰に師事して儒学を学んだ）が、琉球のそ
れまでの学風を評して「此地、士林ノ学風ハ程朱信仰德
育是主トシ、大体ノ士人、小学ノ講義ハ得意ナリ。居家
日常内外ノ人事、小学一部ヲ以テ之ヲ修斉スベク精神ト
相見ヘ、倫理是重ンジ、儉樸為風經義講究ノ余事、渡清
ノ節入用ニ付、詩賦ノ稽古ヲ作スマテニテ、内外ノ歴史
ニ涉獵シ、古今ノ得失ヲ議スル如キハ先ツ無用ノ姿タニ
属セリ。且ツ、論客輩出候テハ、小邦ノ為メ方折り合モ
ヨロシカラス、面倒ナリト考ヘタルモノト見ヘ、官ノ文
庫ニモ左国史漢資治通鑑等アルノミニテ、古今ヲ徴スヘ
キ内外ノ史籍ハ欠乏セリ」（『南島紀事外篇』）と記し、
また、大正期、沖繩に書誌調査した武藤長平（広島高師
教授）が「せめて唐本だけは他府県の図書館よりは数多
くありたいものだと思ふ」が、蔵書は「ありふれた者ば
かり」（『西南文運史論』）と嘆いたのは、彼らの体内に
存した江戸儒学の伝統、經学の伝統を考えればよく了解
できる（慨嘆）である。がしかし、逆に見ると、彼らに
とつて心外であつた事実そのものが、実は琉球の儒学世
界の性格を物語っているものであり、それは私たちが、江
戸期儒学を論じる視点からは見落とされてしまう視点で
もあるのだ。西村がいみじくも「此地、士林ノ学風ハ程
朱信仰德育是主トシ、大体ノ士人、小学ノ講義ハ得意ナ
リ。居家日常内外ノ人事、小学一部ヲ以テ之ヲ修斉スベ

ク精神ト相見へ」と記した事実（朱子学の社会的実現）を、私たちの（江戸儒学の経書注釈中心の）視点は見落としてしまふからである。それは社会的思想としての、現実の民衆の道徳的生活、道徳的統治に直接関わるものとしての、朱子学の実現という視点である。今時の戦争による焼失等により現存資料に乏しい、近世期琉球士人の思想生活を探る上での貴重な資料、東恩納寛惇によって翻刻された『阿嘉直識遺言書』にも「漢書の講談は、十五歳から二十五歳まで、諸事の稽古方かけて、六論・小学・四書を出して相学び……」と明記されるように、経学の根幹たる四書に並んで、（教諭）本の『六論（六論衍義）』と『小学』が必須の学習書として挙げられているのである（『六論衍義』については後述）。冒頭に掲げた、石垣島に残る『小学』テキストの意味も、そうした視点から考える必要があるだろう。

では、こうした琉球儒学の場面を起点に、逆に日本、朝鮮を含む東アジアの朱子学世界を見直すことで、どういふ視点が出てくるだろうか。それは、経書注釈における相違や知識人の世界認識の問題、あるいは純粹な朱子学対**化した朱子学、といった視点とはまた別の、書物やその読み方の流通をも含み込んだ視点からなされる、いわば脱中心的な、動態としての東アジア近世思想史への視点である。

ひとまず、近世日本における『小学』受容の姿から述べておこう。

三 江戸期の儒学と『小学』

『小学』は江戸期の儒者において、必ずしも多く議論された書物ではなかった。もちろん、本来童蒙を対象とした教訓書であるということ、また、朱子学が江戸期儒学において、一貫して主流であったわけではなかったという事実も、その理由の一つである。そして、その朱子学も、渡辺浩が鮮明に論じたように、政治思想の側面から見る限り、家礼や、葬制に関わる部分において欠ける部分が大きいものであったことも事実である。

それは端的には、江戸期の儒者が直接政治に関わることが少なかったこと、江戸幕府が科挙を採用しなかったことと関わっている。もちろん、荻生徂徠（一六六六—一七二八）や新井白石（一六五七—一七二五）など、幕政に関わった有力な儒者がいたことは事実であるし、藩政に力を発揮した儒者の例もある。もとより、儒学が治世のための学問であることを、儒者自身はよく承知していた。しかしながら、熊沢蕃山（二六一九—九一）の「一人の芸者」という有名な自嘲が示すように、基本的に、本来儒者が担うべき政治の道の外側に、江戸期の儒者たちはいた。その結果、逆に、儒学の知識が民間に拡大し、伊藤仁斎（一六二七—一七〇五）や大阪、懷徳堂の儒者たちに代表されるように、民間（町人世界）において儒学思想が深められるという、同時期東アジアにおいても特異な現象が起きたのである。伊藤仁斎は京都の商家の

生まれであり、懷徳堂は、大阪の裕福な商人たち自身によつて創立、運営された学校であつた。「知」の大衆化、拡散という、近代を準備した知識人の形成は、こうした条件の下に初めて起り得た。しかしながら同時に、現実の社会体制や政治と直接つながらない、もっぱら書物の解釈を介しての儒学が、かなり一面的な儒学の展開相を示したことも、また事実である。それは儒者の朱子学理解においてもそうであつた。

江戸期の儒者で、朱子学に最も強く反応したのは、いうまでもなく「古学派」の儒者たちである。伊藤仁斎は、「理」を「本死字（元々実体の無い概念）」と呼び、荻生徂徠は「理」を「定準が無いもの」と呼んで、その根柢の不確かさを批判した。彼らは、朱熹の理気論を、その（言語―論理）に内在する問題として把握し、それを起点に文献批判を行い、朱熹注釈の問題性を指摘したのである。ただ、彼らは朱子学が、現実の中国社会、科挙を経た士大夫階層によつて主導的に構成される中国社会においてどう機能し、それが朱子学の論理構成とどう密接に関わっていたかという点には、ほとんど関心を抱かなかつた。彼らはもっぱら経書注釈の現場において、世界を解釈する「言語」、そしてそれを成立させる「論理」に関心を向けたのである。それゆえ、より鋭敏に「言語」と「思想」の問題に関心を集中させたのだとも言い得る。そういう状況から考えると、江戸期を代表する儒者たちに、家札に関する発言が少ないのも、また『小学』を

論じることが少ないのも理解できることである。しかしながら、だからといって、江戸期に『小学』に関わる書物が出版、流通しなかつたかという点、実はそうではなかつた。幕府創設期の重臣大名、保科正之（一六一一―七二）が、『小学』を読んで朱子学に開眼したと伝えられるように、また、同じく江戸初期の朱子学者、野中兼山（一六一五―一六三）校訂の『小学』が、多くの藩校の教科書に採用されたように、その社会教化の効力については、早くから認識されていた。そして中村惕斎（一六二九―一七〇二）の『小学国字解』、貝原益軒（一六三〇―一七二四）の『小学句読集疏』、佐藤一斎（一七二二―一八五九）の『校訂音訓小学』、等々一般向け解説書、諺解本が、江戸期を通じて、日本社会に広く流通したのである。もちろん、純粋な朱子学を標榜した山崎闇斎（一六一八―一八二二）には『嘉点小学』があり、その門下、蟹養斎（一七〇四―一七七八）は独自の深い『小学』考察を行った¹¹。そして、そうした『小学』解釈の流れは近代にまで連続し、明治期に至つても『小学句読字引大全』（一八八二）、『蟹頭箋註小学句読稿本』（一八八六）等々の一般向け解説書が出されている。

明治天皇の命を受けて、その侍講、元田永孚（一八一八―一九一）の手で編纂された『幼学綱要』（一八八二）も、その体裁、中身、中心概念は、明らかに『小学』の伝統を継承したものであつた。そこにおいては、「孝行・忠節・和順・友愛・信義・勤学・立志・誠実・仁慈・礼

讓・俟素」等々二十の徳目が掲げられ、その大意が、四書五経や『孝経』などの引用によって解説され、さらに、日本古典からの多くの引用によって内容が補強されたのであった。その意味で、『幼学綱要』は、朱子学的教化の精神が、近代的視線の下に再構成されたものであったと見る事ができる。¹²⁾

このように見ると、『小学』が社会にもたらした影響は決して小さくなかったと言うべきであろう。前に、近世日本において『小学』は、儒者の大きな議論の対象ではなかったと述べた。しかしそれは、『小学』が江戸期の社会に普及しなかったという意味ではない。儒学思想史を研究する上で、新たな見解が出されたかどうかという事でいえば、『小学』は必ずしもそういう位置にはいなかった。それゆえ、今日も日本の思想史研究、中国哲学研究において『小学』研究は多くない。しかし、この一書が社会全般に持ち得た影響力、感化力という点でいうならば、そこにはまた別の論点が必要である。それは、内から、そして外からの、社会教化、(教諭)という、社会思想的な視点である。近世く近代日本における『小学』受容の歴史も、同様に多数の解説書、諺解書が作られ、社会内に機能した、明く清および朝鮮の具体的状況と対照させながら考えていく必要があるだろう。¹³⁾

四 町人自らが学んだ『小学』

先にも述べたように、近世日本において儒学は、多く

町人学者の手によって広められた。江戸期に上方(京都・大阪)において町人の学問、心学を広めた石田梅岩(一六八五—一七四四)が、『小学』を自宅の近隣で講じることから、その学問を少しづつ周りの人々に広めていったと明記されているように(『都鄙問答』、『小学』など教訓本も、民間において普及していったのである)。

実際、江戸後期に大衆的な儒学解説書として全国的に流通した、『經典余師』という叢書は、その限られた書目の中に、古典的経書に併せて、和訓による『小学』解説書を収録している。『經典余師』とは、讃岐生まれで江戸、関西で学び、後に鳥取藩に仕えたと伝えられるが、それ以上のことは不明の学者、溪百年によって編纂・出版された、儒学の初級解説書である。それは、一七八六年から一八四三年にかけて出版された、計十種の経書類に和訓を付し、通俗平易な解説を加えた啓蒙的な叢書であり、江戸期庶民におけるベストセラーであった。その流行ぶりは、この書名をもじったパロディ本まで出るほどであった。後に、明治期の政論家でありジャーナリストであった、徳富蘇峰(一八六三—一九五七)が、自分の学歴を語って、幼少期に手ほどきを受けた先生が、懐に『經典余師』を隠し持っていて、それによって講義を行っていたと記しているように、市井の学校、寺子屋から、ちよつとした学校の先生までが、授業の参考にするような叢書であった。その、四書、書経、孫子、近思録、等からなるシリーズの内に、『小学』も加えられたので

ある。

叢書『經典余師』の売り文句はその書名通り、「有り余るほどの師匠」がその中に詰まった「本」であり、「まず本文を載せた後、平かなでその読みを付し、さらに事細かに和語で解説を書き加えたもので、幼少の女子といえども、読んで理解することができ、父母夫への道も学ぶことができる」ということを第一目的にしたものであった。実際、地方の一般女性もこれを読んでいくことが、資料調査からも裏付けられている。¹⁵ ちなみに、『經典余師小学』は、まず一七九一年に大阪で出版された後、江戸でも販売され、一八六三年には再版されるに至っている。

もちろん、漢百年の解釈自体に何か独自性のあるものがあつたわけではない（それゆえ、漢百年自身についてこれまで言及されることが少なかつた）。和訓が付され（そして、すべての漢字に「ふりがな」が付された）、きわめて一般的で、ごく平易な解説が付されただけの叢書である。ただ、それが、為政者の側からの教科書としてではなく、また、著名な儒者からの専門的解説とかたちではなく、「誰にでも読める」かたちで安価に提供されたということ、そしてそれが一般社会に多量に流通したということに思想的な意味がある。

教育社会史の高橋敏は、「『小学』が寺子屋の基礎」であり「寺子屋教師のバックボーン」であつたことを、歴史資料から明らかにしている。¹⁶ まさに身の回りの人と

つきあい、親を愛し、年長者を敬し、師を尊び、友に親しむ、道徳の実戦書として、『小学』が民間教育の場で機能した側面が現実存したのである。高橋の紹介する事例で言えば、北関東上州赤城山西南麓原の郷村の寺子屋、九十九庵の師匠、船津伝次平は、窮乏した村の復興のために、村民の教育を一番の課題としていた。彼は「理想の村」を作るためには、父母、兄弟、師弟の間の道徳を確立し、礼儀作法を正しくすることが何より肝要であると、そのための教科書としては『小学』が最適だと信じ、それを基に村の子弟を教育したのである（船津が寺子屋の授業で重んじたもう一つの書物は、『論語』であつた）。この高橋の紹介した事例は、江戸後期の寺子屋の一般的な姿であると考えられる。寺子屋では、読み書き算盤、手紙の書き方の授業、そして『論語』に加えて『小学』が教授されたのである。

こうした社会教育に朱子学（教諭）本が果たした役割については、これまで教育史の話題として取り上げられることはあつても、思想史の課題として取り上げられることは無かつた。それは、多くの思想史研究が経書解釈の場面にもつぱら関心を集中させたからであり、実はそこには近世日本儒学自体のある種の「偏り」が反映していたと見ることができるだろう。当該社会に活きた思想として近世東アジアにおける朱子学を捉え直すならば、寺子屋での学習や、社会教化の思想にも、当然、視線が向けられるべきだろう。その一つの実例が『小学』であ

り、後に述べる『六論』『六論衍義』等の、いわゆる（教論）本なのではないだろうか。¹⁶⁾

五 〈教論〉社会という視点

一般に江戸期日本の思想は、〈鎖国〉体制下にあったという歴史的前提と、これまでの思想史研究が、連続、非連続、どちらの立場に立つにせよ、近代との関わりから振り返られる傾向が強かったため、概して〈一国思想史〉の視野から叙述されることが多かった。儒学思想史においても、江戸の思想はその〈日本的〉展開という側面で語られることが多かった。江戸期儒学と中国、朝鮮のそれとの思想連鎖が語られる際にも、個別事例として、直接、間接の〈影響関係〉有無の検証において議論されることが多かったのである。そこには、江戸期の思想や文化の展開を、無意識のうちに〈鎖国〉状況下の一国内の出来事としてとらえる視線が、私たちのなかにぬぐいがたく存していたからである。これは、近く現代の日本思想史学自体に内在する問題であると同時に、思想史という学問が、近代に成立した学問として、「国家」の枠組みを無意識のうちに前提としていたからであろう。

近世期の東アジアにおいては、各地域において〈海禁〉政策が採用されたため、各地域は個別の展開をとげたように思われがちだが、実際は、地域間において活発な交流が実現していた。江戸期日本も、すでに多くの研究が明らかにしたように、大量の海外情報と人的交流を介し

て、世界の潮流と緊密につながっていた。¹⁸⁾近年よく言われる、ブックロードという視点もこうした観点の重要性を物語るものである。明清の最新の学問情報も時をおかずに江戸期日本に伝わっていたのである。そうした文献の一つに、『六論衍義』、『聖諭広訓』といった朱子学による〈教論〉書の類がある。そして、そうした一群の〈教論〉書の普及のありようを考えることは、これまでの理論中心（経学中心）の儒学思想史とは異なる、社会思想としての、現実の民衆統治に関わったものとしての、朱子学の実現を考えることにつながるのではないだろうか。十八世紀の東アジアを、朱子学思想に基づく〈教論〉社会が多様に形成された世界として捉える視点である。

六 『六論衍義』の流通とその影響

『六論衍義』とは、順治九年（一六五二）、清の世祖順治帝が頒布した六箇条の〈教諭〉、「六論」（第一孝順父母、第二尊敬長上、第三和睦郷里、第四教訓子孫、第五各安生理、第六母作非為）に、康熙年間、范鋳が白話による解釈を加えて民間に広まったものである。また、『聖諭広訓』とは、康熙九年（一六七〇）、康熙帝により「敦孝弟以重人倫、篤宗族以昭雍睦、……」の十六条を以て発布された『聖諭』が、後に、雍正二年（一七二四）、さらに演繹されて世に弘布されたものである。¹⁹⁾『聖諭広訓』はあまねく各省の軍、官、民に向けて講読され、清末の光緒年間に及んでもなお広く行われ、古制に則つ

て毎月朔日十五の二日にその講読会を開くという風習が続けられて来た。²²⁰ 兩（教諭）のそれぞれ第一条にも明らかに示されるように、これら（教諭）は、「孝」の思想を天下に強力に教布するものであった。その思想的意義については、東洋史家、桑原隲蔵は、「中国歴代の天子は、「孝を以て天下を治む」（以孝治天下。―『孝経』孝治章）という金言を奉じ、孝道奨励をもつて、政治の第一要諦」とし、「孝治主義を以て、平天下の要諦と認めて」いた、と評している。また大村興道は、教育思想上の『聖諭広訓』を論じて「少くとも乾隆初年より阿片戦争に至るまで百年間清朝が安泰であったことは、この聖諭広訓並にそれに関連する施策に負う所が大であった」とし、「広訓が如何なる個々の清朝に於ける学者の教育思想や思潮よりも強力であり、雍正以後二百年間を通じて生き続けて之を廃し得なかつたことは、清朝教育史上広訓の如何に重要な意義を有していたかを認めざるを得ない」と述べている。²²² そしてこの清朝から近代を通じての、強力な教化の力は、民間郷村の自治活動「郷約」における「宣講」を通じて保持され続け、また、「里甲」では毎月六回、長老による巡回唱導がなされたのであった。²²³

この、清朝に隆盛を迎えた（教諭）、なかでも『六論衍義』が、琉球使節の「江戸上り」（江戸期を通じて約二十回、琉球からの使節が慶賀のために薩摩経由で江戸に来訪した）に際して、江戸にもたらされ、それがが広

範に流通することとなったのである。²²⁴ 本書を江戸にもたらしたのは、琉球の大儒、程順則（一六六三―一七三四）であった。そして、その内容に感銘した第五代將軍、徳川吉宗（一六八四―一七五二）は、江戸町奉行大岡忠相に命じて、江戸の寺子屋の師匠を奉行所に召集し、『六論衍義大意』を与えて、それぞれの寺子屋でそれを教科書として使用させたのである。その後、「もともと愚民童幼のための修身書」であった『六論衍義』は、訓読本、和訳本を始め、日本全国において、数多くの異版、類書が出版され流通することとなった。荻生徂徠の手になる訓点本、室鳩巢（一六五八―一七三四）による和訳本『官刻六論衍義大意』に始まり、京都、芸州、遠州掛川藩、佐倉藩、等々の藩による新たな版本まで、明治前期に至るまで、実に四十種以上の版本が、全国に流通するに至つたのである。²²⁵ 明治期の知識人、内藤恥叟は「遠くの村々にまでこれらの本が売り出され、家ごとにこれを買ひ求めて、珍重しない者はいなかつた。それほどこの本の「風化」の効は大きかつた」と回想している（『江戸文学志略』）。一方、『聖諭広訓』の方は、町人儒者中井竹山（一七三〇―一八〇四）が「序」を付して、その学問所、懷徳堂から和刻本として出版されたのであった。²²⁶

こうした日本全国に及ぶ『六論衍義』本の流通について、歴史学者深谷克己は、「東アジア法文明」を（教諭）による統治、すなわち「武断」でないかたちで、「安民」

「無事」の実現をめざし、かつ統治者の正当性を説くことによつて、治者―被治者間の合意の形成をめざす方法の浸透ということが、そこで目指されたのだと指摘している。そして彼は、こうした（教諭）思想が江戸期の日本社会に浸透した原因を、「小家族の普及した日本社会では、『六論』の受容は乾いた土に水が染み込むようにすみやかに広がった」からだとしている。⁹⁷

元来、中国において、漢民族と異なる満洲族によつて建国された清帝国の新たな国家道徳として孝道思想が再編された結果、〈教諭〉というかたちをとつて全土に公布された『六論衍義』が、江戸期日本の土壌で、庶民教化の教本として広汎に流通したのである。そして江戸にこの書をもたらした琉球に、和刻本『六論衍義』が逆輸入され、それがまた近世琉球社会における教本として使用されるといふ事態も発生させている。前述したように、近世琉球は朱子学がもつぱら学ばれた世界であつたが、そこでは朱子学の理気論等の議論より、むしろ実践道徳が尊ばれ（蔡温『御教条』など）、『小学』が多く学ばれたのであつた。そして最初にも触れたように、江戸から持ち込まれた和刻本の『小学』が琉球方言による解説が付けられ、流通していたのである。まさに海域を越えて思想、テキストが流通していたのである。

七 近世東アジアにおける朱子学の意義、もう一つの視点

これまで、近世日本において朱子学の影響を考える際には、多くの場合、経書解釈の場面の問題、世界認識の方法の問題として議論されてきた。特に朱子学に内在する（言語―論理）の受容の仕方、反発、もう一つの議論の提示、として理解されることが多かった。しかしながら、以上、述べてきたような、民衆レベルでの『小学』の受容、朱子学に思想に基づく〈教諭〉本、『六論衍義』『聖諭広訓』の流通、拡散過程を視野に入れるとき、民衆の道徳的生活に直に影響したものとして、人々の「生活」に関わつたものとして、朱子学的世界の近世東アジアにおける拡散を考える必要もあるのではないだろうか。社会的に民衆レベルで機能したものとして、朱子学的世界を捉え直すことの必要性である。社会的に機能したものとしての朱子学的世界展開の問題である。そうした視点を付け加えることで、近世東アジア思想史も、これまでの、知識人中心の思想史だけではなく、広い地域のも、また厚みのある思想史として語り出すことが可能になるのではないだろうか。そして、そうした視点を導入するとき、琉球儒学 of 思想史上の意義もまたとらえ直されることになるはずである。

さらにいえば、近代東アジアにおける「国民国家」成立の様相、そこにおける大衆動員の姿を考える際、それまでに各地域において蓄積された思想土壌を考えることが必須になってくるだろう。たとえば、近世東アジアに広範に流通した〈教諭〉思想の日本での受容の先に、明

治期の、「忠君愛国」をいう『教育勅語』が存したこと
は明らかである。これもまた、近代日本の一つの朱子学
の実現であったと言えるのではないだろうか。もちろん、
こうした問題は、十九世紀日本の「近代国家的」儒学再
編の問題として、別途考えられるべきことである。²⁸⁾

注

- (1) 高橋俊三『琉球王国時代の初等教育―八重山における漢籍の琉球語資料』榕樹書林、二〇一一年、二八四頁。
- (2) 同書、二五二―二六頁。
- (3) 同書、二二頁。琉球における和刻本も含む漢籍資料の流通については、高津孝・榮野川敦編『科研(総合研究(A)) 報告書 琉球列島における宗教関係資料に関する総合調査・漢籍目録篇―琉球関係漢籍調査目録―』榕樹社、一九九四年、高津孝『博物学と書物の東アジア―薩摩・琉球と海域交流―』榕樹書林、二〇一〇年、を参照。高津孝は、『小学句読』の琉球版の残存にも着目し、「琉球という独自の文化圏の存在を抜きにしては考えられないテキスト」と指摘している(『琉球における書物受容と教養』島村幸一編『琉球―交又する歴史と文化』勉誠出版、二〇一四年)。
- (4) 田名真之「近世久米村の成立と展開」『新琉球史 近世編(上)』琉球新報社、一九八九年、二一六頁。
- (5) 詳しくは、中村春作「琉球における「漢文」読み―思想的読解の試み―」(中村・市来・田尻・前田編『続「訓読」論―東アジア漢文世界の形成』勉誠出版、二〇一〇年)、同

「近世琉球と朱子学」(市来・中村・田尻・前田編『江戸儒学の中庸注釈』汲古書院、二〇一二年)、を参照されたい。
(6) 宝玲文庫蔵本『大島筆記』(沖縄県立図書館蔵「複写本」による)。

(7) 西村捨蔵『南島紀事外篇』(一八八六年)。

(8) 武藤長平『西南文運史論』岡書院、一九二六年、一八九―一九〇頁。

(9) 「阿嘉直識遺言書」『東恩納寛悼全集』五、第一書房、一九七八年、四二七頁。

(10) 渡辺浩『増補新装版』近世日本社会と宋学』東京大学出版会、二〇一〇年(原著は一九八五年)参照。なお、近年、近世日本の儒者における儒礼の具体相を、崎門の儒者と懐徳堂学派について明らかにした、注目すべき研究が出た(田世民『近世日本における儒礼受容の研究』ぺりかん社、二〇一二年)。

(11) 白井順「蟹養斎の講学―九州大学碩水文庫を主たる資料に仰いで―」『哲学年報』(九州大学人文科学研究院)、第七十輯、二〇一一年。

(12) 朝鮮儒学を研究する小倉紀蔵は、『朱子学化する日本近代』(藤原書店、二〇一二年)において、朱子学は、江戸時代においてではなく、むしろ近代日本において有意味化したと説くが、筆者も同意見である。

(13) 白井順「『小学』注再考―その思想研究の可能性を求めて―」(東方学会、二〇一〇年六月、「報告資料」)、同『小学』注再考―近世東アジアにおける『小学』の受容』(二〇

一〇年、未刊稿)等、参照。白井は明清から朝鮮儒学までを視野に入れた『小学』研究を行っており、筆者も、その成果から多くを学んだ。また、筆者も参加する機会を得た、韓国ソウル大学奎章閣韓国学研究院主催シンポジウム、Cultures of Documentation in East Asia*(二〇一三年、八月)における、韓国人研究者による二つの報告、鄭豪薫「朝鮮前期における『小学』の刊行と活用」、李玲景「朝鮮後期(小学)の諺解の活用と普及」は、近世日本における受容を相対的に比較する上で、有益な視点に富むものであった。

(14) 『徳富蘇峰「蘇峰自伝」』日本図書センター、一九九七年(原著は、一九三五年)、四四頁。

(15) 鈴木俊幸『江戸の読書熱』平凡社、二〇〇七年。

(16) 高橋敏『江戸の教育力』「ちくま新書」筑摩書房、二〇〇七年。

(17) 「六論」「聖諭広訓」の近世日本における受容の思想的意味については、中村春作「教諭」社会という視点―清、琉球、江戸をつなぐもの―「哲学資源としての中国思想 吉田公平教授退休記念論集」研文出版、二〇一三年、も参照されたい。

(18) 大庭脩『江戸時代における中国文化受容の研究』同朋舎出版、一九八六年、同『江戸時代における唐船持渡書の研究』関西大学出版部、一九六七年、ロナルド・トビ(速水融ほか訳)『近世日本の国家形成と外交』創文社、一九九〇年、荒野泰典『近世日本と東アジア』東京大学出版会、一九八八年、ほか。

(19) 近年の包括的研究成果として、周振鶴『聖諭広訓―集解与研究』上海書店、二〇〇六年、がある。

(20) 魚返善雄『漢文華語 康熙帝遺訓』大阪屋号書店、一九四三年、二一―三頁。

(21) 桑原隲藏(宮崎市定校訂)『中国の孝道』講談社学術文庫、一九七七年、三一―三四頁。初出は一九二七年。

(22) 大村興道「清朝教育思想に於ける「聖諭広訓」の地位について」林友春編『近世中国教育史研究』国土社、一九五八年、二六七頁。

(23) 阿部泰記「聖諭宣講の伝統と創新」『立命館文学』第五九八号、二〇〇七年。

(24) 『六論衍義』の琉球を介した江戸への流通に関しては、東恩納寛惇『改訂・増補六論衍義伝』一九四三年(『東恩納寛惇全集全集』第一書房 八巻)、及び、中村忠行「儒者の姿勢―『六論衍義』をめぐる徂徠・鳩巢の対立」『天理大学学报』七十八輯、一九七二年、に詳しい。

(25) 許婷婷「徳川日本における「六論」道徳言説の変容と展開―「六論衍義」と『六論衍義大意』の比較を中心に―」『東京大学大学院教育学研究科紀要』第四七巻、二〇〇七年、参照。また、近世台湾における(教諭)の展開については、陳文媛「清朝統治下における台湾の道徳教育―「聖諭」の考察を手がかりとして―」『慶應義塾大学大学院 社会学研究科紀要』第三八号、一九九三年、を参照されたい。

(26) 懷徳堂における『聖諭広訓』和刻本出版に関しては、前掲、陶徳民『懷徳堂朱子学の研究』、及び、同『日本漢学思

想史論考』関西大学出版部、一九九九年、を参照されたい。

(27) 深谷克己「東アジア法文明と教諭支配」早稲田大学アジア地域文化エンハンシング研究センター編『アジア地域文化の発展』雄山閣、二〇〇六年。同『東アジア法文明圏の中の日本史』岩波書店、二〇一二年。

(28) 中村春作『江戸儒教と近代の「知」』ペリかん社、二〇〇二年、も参照されたい。

*本稿は、二〇一三年十月五日、国立台湾大学人文社会高等研究院において開催された、国際シンポジウム『関係性における日本、韓国研究』における発表原稿に、若干の修正、加筆を施したものである。